

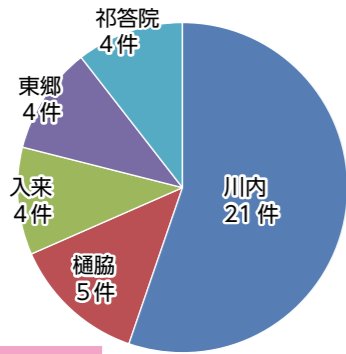
令和6年 火災・救急統計

火災件数は令和5年より4件増加し、38件でした。おおよそ10日に1件の割合で発生したことになります。火災種別は建物火災16件、林野火災4件、車両火災3件、その他火災15件でした。出火原因はグラフのとおりで、「たき火」が原因の火災が多くなっています。たき火などの焼却行為は農作業に伴う軽微なものを除き、**原則禁止**されています。また、枯草焼きなどを行う際は、火災の煙と間違わないようにするため、消防署への届出が必要です。

火災

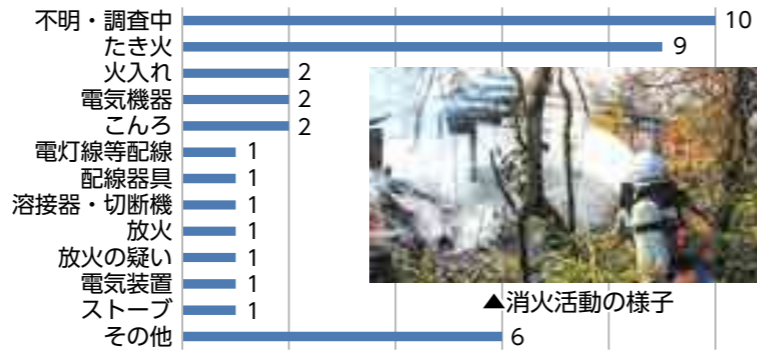
38件

地域別件数



前年比4件増

出火原因別



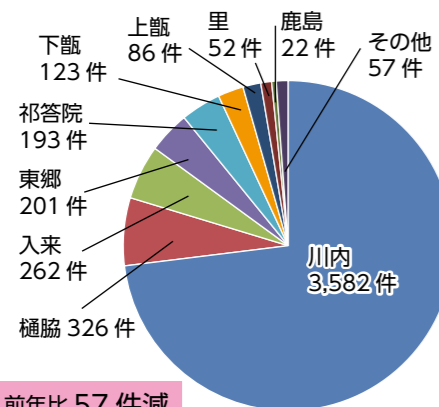
▲消火活動の様子

救急件数は令和5年より57件減少し、4,904件でしたが、市町村合併後2番目に多い件数でした。これは1日当たり約13件発生したことになります。なお、搬送人員は令和5年より34人減少し、4,308人でした。

救急

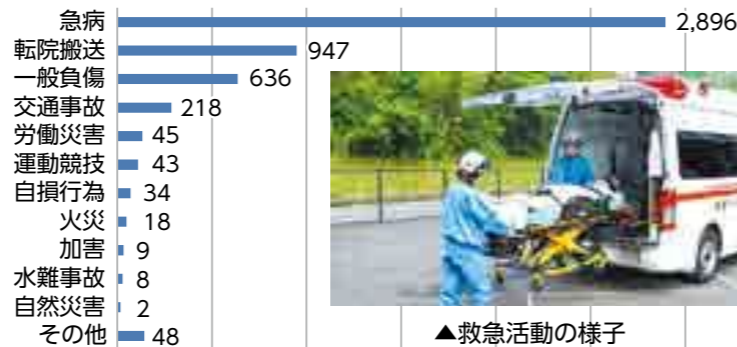
4904件

地域別件数



前年比57件減

救急事故別



▲救急活動の様子

新資機材を紹介します！「水中ドローン」



水中ドローンは、令和6年に本市在住の山室克己様より寄贈いただき、消防本部に配備し、海や川などの水難事故の際に活用しています。

本体に装着されている4Kカメラや超広角魚眼レンズ、AIの水中画像補正で、画像がより広く、鮮明に映ることで、要救助者の早期発見につながります。

水深100mまで潜ることができ、360度全方向に移動が可能になっています。また、LED照明システムが搭載されているため、これまでできなかった夜間の情報収集も可能になりました。事故発生時には当局潜水隊と連携して、救助活動にあたります。

自主防災訓練や消防訓練の計画の際は、防災研修センターをご利用ください。



人の心をつなぐために

小林

香織さん

「人の心をつなぐ」とは…

文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージしたコーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当ててを目的としています。

患者さんのケアや診療の補助などさまざまな分野で人々に寄り添い、私たちの健康を守る看護師。今回は、済生会川内病院に勤務しながら、原動力災害医療の普及に励む看護師の思いに寄り添います。

災害医療に従事

「母が保育士だったため、自分も目指そうと思ったが、看護師の資格で看護師としても保育園で働くことができるという知り、資格を取ったことが看護師になるきっかけ」と話すのは済生会川内病院に勤務する小林さん。済生会川内病院は、原子力災害時に被災地域の原子力災害医療の中心となって機能する「災害医療拠点および被災者医療機関」に指定されています。

小林さんは、被災地で適切な医療・看護提供を行う災害支援ナースや大規模な災害や事故の発生時に、被災地に迅速に駆け付け、救急医療を行うための専門的な訓練を受けた災害派遣医療チーム(DMAT)の資格を持っています。

人生の転機

DMATの資格を取るきっかけとなったのは、平成23年3月11日に起きた東日本大震災。「同じ日本でこのような災害に遭っている人たちがいるというところに何とも言えない気持ちになった。それと同時に、何もできず何事もなく過ごしている自分に複雑な感情があった」と言います。さらに小林さんは、「もしもの時に分らないこと

があることが怖い。いざとなつた時に動揺せずに行動し、一人でも多くの人の命を救えるように学びたいと思った」と話します。

そこで、勤務先の病院の許可を得て、長崎大学大学院に入学し、災害・被災者医療科学を専攻しました。大学院での2年間は仕事と家庭の両立で大変でしたが、周りの協力があってから乗り越えることができました。笑顔で話してくれました。



▲長崎大学病院での研修の様子

災害現場での活動を通じて

令和6年1月に発生した能登半島地震で、小林さんは石川県輪島市の病院支援に派遣されました。厳しい環境の中、看護師たちが疲弊しながら働く姿を見て、被災者でもあり、支援者でもあると感じたそうです。

原子力災害医療の普及

「仕事に励みながら、愛犬2匹と過ごし、子どもたちの夢を応援したい」と穏やかな日常を望む小林さん。

普段は病院勤務以外に、看護師や看護学生に向けて講義を行っています。「学んだことを一人でも多くの人に伝え、災害時に医療従事者の不安を軽減し、支援していきたい」と原子力災害医療の普及に対する思いを話してくれました。



▲愛犬と娘さんと写る小林さん(左)